

# チャンスと法則

——パース研究(3)——

西 勝 忠 男

## 目 次

1. は じ め に
2. 問 題 設 定
3. チャンスの意味
4. 必然性について
5. 演繹主義と物理主義
6. チャンスと法則
7. む す び

「哲学の原理は、それがわれわれの脈動にはっきり確かめられなければ、原理とはならない」

——ジョン・キーツ——

## 1. は じ め に

わたしはさきに『哲学』<sup>(1)</sup>誌上において、パースの確率概念を検討し、かれの「確率」をめぐる論理思想と倫理思想との結接点を追求したのであるが、ここでは、問題点として指摘しながらも、論及する余裕のなかった「チャンス」(*chance*)という微妙な概念を、この論文においてとりあげてみたいと思う。

パースにおける「チャンス」概念が、かれの“*tychism*” (偶然主義) や “*Agapism*” (アガペ主義または創造愛的進化性) と名づけられた思想の中にあらわれてくる重要な要素であることは、現代哲学の研究者によく知られていることである。これらは形而上学的色彩の濃い思想、いや、形而上学そのものといえるのであるが、そこに内蔵されている多様にして独創的な諸観念は、たんに分析主

義的手法だけを重んじる思想家にはみられない、興味ある示唆に富んだものである。

わたしは、パース哲学の研究には、論理的な側面からの考察が重要なことはもちろんであるが、それとともに、形而上学的な視点からの考察を合わせもたなければ、十全な理解を望めず、したがって、正当な評価をくたしえないと考えるものである。しかしながら、ここではこれらの形而上学的思想に直接かかわることはしないで、かれの提起するチャンス概念を解明し、さらに「法則」との関連を考察したいと思う。そこで、わたしはまず、次のような問題設定をすることによって、チャンス概念へのアプローチを試みることにする。

〔註〕

- (1) 日本哲学会編集『哲学』第20号(1970年10月)『パースの確率概念』。なお、わたしの一連のパース研究シリーズを構成するものとして、さきの『城西経済学会誌』第5巻第1号(1969年4月)に掲載した『パースにおける論理的なもの——パース研究(1)——』に続き、この『哲学』誌上の論文に『パース研究(2)』というサブタイトルを追記しておきたい。したがって、本論文は『パース研究(3)』とよぶことにする。

## 2. 問題設定

(1) チャンスという概念は確率 (*probability*) という概念としばしば同義に用いられているが、このことは「チャンス」のどのような意味においてなのであるか。いいかえれば、チャンスは確率計算と同様に計算可能なのか、それとも、数量的なかたちをとらないようなチャンスというものがあろうのか、という問題として表現できるであろう。そこに、チャンスについて少なくとも二つ以上の意味が考えられてくる。

(2) 数値表現の不可能な特性を示すチャンスや数値を出してもあまり意味のないチャンス——これを仮に非数値的ないし哲学的チャンスと名づけてもよい——は、命題としてはどのような特性をもつものなのか。また、古来哲学者たちは偶然性の概念に必然性ないし法則という概念を対比させて考えてきたが、この両者は命題としてどのような関連をもちうるのであろうか。

(3) しかしチャンスがたんなる命題ではなく、むしろ、いわゆる実体論的ないし実在論的な考察がなされるべき対象であって、この宇宙の構成要素として考えられるべきものであるとすれば、それは客観的な科学的対象としてのみ扱われるべきものであるのか、それとも、いわゆる主客の別をこえた実在を求めるといふ、形而上学的ないし存在論的特性をもつものとしても扱おうのか。この場合、科学的探究とは何か、形而上学的思索とは何か、というこれら両者の本性についての考察がなされることによって、それら相互の関連の仕方を多少なりとも明示することができるであろう。

ところで、科学の成果と形而上学的諸観念とを統合的にとらえようとする立場、平たくいえば、われわれ自身を含むこの世界を、どのように理解すべきかを考察しようとする試みは、本来、宇宙論 (*cosmology*) とよばれているものであるのだから、チャンスと法則との関連という問題を考察する立場を、一応、宇宙論として規定しておくことができるであろう<sup>(1)</sup>。

(4) 最後に、われわれのペースが絶対的チャンス (*absolute chance*) というものを想定せざるをえなかった根拠は何であろうか。いいかえれば、絶対的チャンスというものをもち出したペースの意図はどこにあったのか、ということを問うてみよう。

以上四つの問題設定は、カテゴリーカルにみれば、それぞれ意味論的、論理的、認識論的、形而上学的と名づけることができるとしても、いうまでもなく便宜的であり、入り組んだ問題の性質上、明確に区分できないものであって、むしろ、わたしの心おぼえとしてあげたというべきものである。わたしとしては、なるべく常識的一般的な見方から、ペースのチャンス概念へのアプローチをめざそうとしているのである。

〔註〕

- (1) ペースは1891年から1893年にかけて『モニスト』(*The Monist*) 誌上に六篇の連続論文を掲載したが、それらは全体として宇宙論に関するものであって、本論の中心問題であるチャンス概念は、主として第二論文『必然性の検討』(*The Doctrine of Necessity Examined*) で扱われている。

### 3. チャンスの意味

さて、まず「チャンス」ないし「偶然」ということについて、日常経験の世界において用いられている仕方を考察することから出発しよう。よく用いられる例をいくつかあげてみる。

- (a) 「けさ神田で偶然旧友と出合った」
- (b) 「偶然に大震災が起こった」
- (c) 「……のチャンスはこれこれである」

まず(a)は、出合うことがわれわれの意図ないし計画ではなかったということの意味するにすぎない。(b)は、原因については不明だが、無原因な事象ということは矛盾しているから、「偶然」ということばは無知をあらわすとされるのである。諸種の能力に限界のある人間には望みがたいことであろうが、地震についてすべての知識が得られれば、かなり正確に予測可能となるであろう。これら二つのチャンスの用い方に対しては、そのまま確率的数値を求めようとすることにはあまり意味がないといえるであろう。

それに対して(c)は数値による見積りを表わす判断であって、確率概念としてのチャンスと結びついている。これには、たとえばサイコロ投げのように、論理的に可能な選択枝の数さえわかれば、数学的にアプリアリに処理できるものと、たとえば男子の出生率のように、経験的、統計的に相対頻度として算出することのできる場合とがある。実際問題において、予測としての力を発揮するものは後者の相対頻度として見積られた確率であって、パースもこの意味の確率を考えていたことは、前論文においてすでに指摘したところである。

相対頻度としての確率という考え方は、大量現象ないし反復可能な事象としてまとめてみたときに、規則性ないし法則の支配が認められるとするのであるが、個別事象については、盲目的な偶然性によるところが大であるとみなされるのである。個別事象ないし小数事象はいつでも大数事象に変わりうるものであるから、チャンスないし偶然が、法則として扱われうるほどの大数事象であるとされるのはいつからであるのか。それは、事例の数が多くなるにつれて、漸

近的に法則に近づくという以上には表現の仕様がなからう。もっとも、確率空間を構成して数学的モデルを作り、そのモデルを任意のサンプルについて検討することによって、少数事例にも適用して、モデルの正当性を客観的に決定するということができるのである。

しかし、どこまでもすっきりしたかたちで処理しようとする数学的確率論の立場からすれば、捕えどころのない個別的なチャンスというものを手に負えないものとして無視し、一般的な大量現象の中の一員として埋没させてしまう仕方を取扱わざるをえない。というのは、一般化や抽象化をなしえないような場面においては、数学的思考はなんの役にもたたないからである<sup>(1)</sup>。

ところでパースは、一方ではこの宇宙における齋一性 (*uniformity*) に強くひかれてはいたが、他方では、それとはまったく対照的に、すべての事象に見出される「たんなる偶然」 (*mere chance*) とよばれるものや、無限に存在する「特異性」 (*specificity*) や「多様性」 (*diversity*) というものに、さらに強くひかれていたと思われる。

これら、事象における特異性や多様性は、パースによれば、すべてチャンス・の存在を示すものにほかならない<sup>(2)</sup>。しかも、この特異性 (*proprium*) の探究こそが、アリストテレスの場合と同様に、パース自身にとっても、最大の論理的関心事だったのである<sup>(3)</sup>。このように、チャンスという問題との取り組み方においても、たんなる数量的一般化としての処理の仕方に満足することなく、これを特異性や多様性の中に示される存在として捕え、その特性を論理的関心のもとに窮めようとするところに、パースの哲学的思索の著しい特質をみることができるのである。

〔註〕

(1) IV. 234~236. (この表記法はパース論文集 *Collected Papers of Charles Sanders Peirce*, Harvard University Press の巻数とパラグラフ数を示す。以下同じ。)

(2) VI. 53.

(3) IV. 233.

## 4. 必然性について

以上のように、「チャンス」を説明しようとするものの一つは数学的確率論であるが、これはすでに一つの決定論的な立場をとっているのだといえる。つまり、これこれの条件がかなえられるならば、これこれの帰結が必然的に導かれてくるとする考え方である。この考え方は、命題としては条件命題のかたちをとるものであり、事象に関連づけるならば、因果律ということになるであろう。しかしながら、このような原理からすべてを律しようとするならば、チャンスという概念はその立場を失ってしまうのではなからうか。チャンスはその特性である偶然性ないしでたらめさを剝奪されて、すべて必然性の一部分へと解消されてしまうからである。

このことは、それ自身因果律によらず、したがって予測可能でもありえないチャンス事象が予測可能な事象系列の中へと組みこまれてしまうことであるが、チャンスはたんにそのような系列化によってのみ考えられねばならないものであろうか。ともあれ、数列について考えてみるならば、ランダム性としてのチャンスという要素は、無限数列においてその特性が見出だされるのであって、有限数列においては、それがはたしてチャンスといえるかどうかの見分けはできないとされているのである。すでにその『自然学』(II. 5. 197a)において、アリストテレスが偶然を無限定なものに属すると定義していることに言及して、パースは「まったく正しい<sup>(1)</sup>」として支持しているのであるが、このことは、数学的確率論のとり立場とパースのチャンス概念との間に、少くとも矛盾は存在せず、両立可能であることを示しているといえるであろう。

次に、予測可能ということとチャンスとの関係を考えてみることにしよう。現代科学が用いる最も基礎的な原理は、できるだけ正確に、しかし可能な範囲内での正確さをもって、予測するということであろう。しかし、この予測ということについていえば、相次ぐ「物理的諸科学の偉大な諸発見に刺激されて、力学の諸原理によってこの宇宙を十分に説明しつくせる<sup>(2)</sup>」というような、ラプラスなどに代表される一種の楽観的な思想が生み出され、予測不能な事象は

科学的脈絡から除去されるとともに、また逆に、科学的対象以外のものにまで、この力学的、機械論的見解が及ぼされてくるということになったのである。このような機械論的自然観は近代物理科学の発展史に伴う当然の副産物といえるであろう。

だから、未来が過去によって完全に決定されるとする機械論的、決定論的立場を徹底させるならば、予測の結果を確かめるということはおそらくあまり意味のないことになってしまうのではなかろうか。というのは、事象はすべて原理にもとづいて完全に定量的であり、決定的であるのだから、自ら出向いて調査研究する要もなく、いわば座して、すべてを見抜くことができる千里眼的能力を有していることが仮定されてくるのであって、われわれは神の如き地位にあることになる。このように、予測ということを決定的立場と結びつけて強調するあまり、こうでないこともありうるという、特称命題で表現できるチャンスの要素をぬぐいさって考えようとするならば、われわれはむしろ、おかしな背理に直面しなければならなくなるであろう。

もちろん、物理学をはじめとする現代科学では、未来が完全に決定されているものとは考えず、統計的原理に立って、不確定性の範囲内において決定されているものとみるから、そこにチャンスの要素を考慮に入れる余地は残されているといえる。つまり、統計的一般化が進められている当の個々の事象についてみれば、ある性質をあらわしたり、あらわさなかったりすることはチャンスに関することだといえるのである。もっと強調的にいえば、個別事象については予測不可能だともいえるであろう。機械論ないし決定論という、古典物理学が自明なこととして仮定している一般的で形而上学的な立場をはなれて、因果律という、より制限された科学的平面において考えても、一つ一つの事象がはたして厳格に因果律にしたがっているかどうか大いに疑問とされるところである。

パースは「自然法則の検証を試みるがよい。そうすれば、だれでも観測を厳密にすればするほど、それらの観測が法則からの不規則なずれ (*irregular departures*) を示すようになるのがわかるであろう<sup>(3)</sup>」と述べている。実際、百万倍

に拡大された顕微鏡の下では、原子のまったくでたらめな動きが瞬間瞬間において視点を移動させるので、観測を続けることはもはや不可能になるといわれている。

法則からの不規則なずれという現象は、観察事実に対する因果律の支配のずさんさを示すものともいえよう。したがって、このずれは観測上の誤差などではなく、パースのいうように<sup>(4)</sup>、われわれはその原因を追求する過程において、それがチャンス（偶然性）によるものであることを認めざるをえなくなるであろう。そうすると、法則からのきわめて小さなずれというこの不規則性が、実はこの世界における本質的な要素となっているのではないかと考えられてくる。このように、法則を説明するためにはチャンスが必要となり、チャンスそのものはまた、法則によらなければ説明できない、ということがいえるであろう。

古典物理学的な決定論を否認する量子力学では、まだより基本的ないし最終的な法則のパターンは見つかっていないにせよ、少なくとも基本的な物理法則はたんなる因果律ではなく、偶然という要素を含めた統計的近似であることを主張しているのである。ともかく、あらゆる自然法則は因果必然的関連と偶然性との両側面から考察されねばならないものではなからうか<sup>(5)</sup>。

〔註〕

(1) VI. 93.

(2) VI. 36.

(3) VI. 46.

(4) *ibid.*

(5) この観点については、著名な物理学者であるボームもまったく同じ意見を述べている。

D. Borm, *Causality and Chance in Modern Physics* (1957), Harper Torchbooks. p. 140 ff.

## 5. 演繹主義と物理主義

以上に、必然性との関連において、もう少し詳しくいうと事象系列と予測可能性という二つの面から、やや一般的にチャンスを考察したのであるが、次に



パースが『必然論の検討』を中心として提起した「チャンス」概念の考察に入ることにはしたい。パースは決定論的立場を示すものとして必然論的または機械論的という名称を用いている。エイヤーによると、パースのいう“*mechanical*”（機械論的）という語にはどれだけのウエイトをおくべきか明らかでない論じている<sup>(1)</sup>。それはそれとして、エイヤーの論議はたいへん興味深いものであるが、わたしはこの「機械論的」を物理法則的なものに直接関連させて考えるよりも、まず、パースの述べている通りに、機械論哲学として捕えるのがよいのではないかと思う。そこで、パースの記述にもとづいて、やや図式的ではあるが、かれの議論の大筋を示すとすれば、次のような構成をもっていると推定できる。

まずパースは必然論者（決定論者）の基本的な主張を次のように表現する。

「いかなる時間における事態であれ、不変なる法則を用いることによって、他のあらゆる時間（未来に対する制限は不可能だから）における事態を完全に決定できる。だから、原初の星雲状態における宇宙と力学法則とがあれば、十分に強力な精神の持主なら、これらのデータにもとづいて、わたしがいま書いている文字のあらゆる癖まで厳格に演繹できるであろう<sup>(2)</sup>。」

さらに続けて、

「あらゆる意志行動ならびにあらゆる精神上の観念が、物理世界の必然性と等しい厳格な必然性の支配下にあると考える人はだれであれ、当然なことであるが、力学法則が不変なる引力と斥力にしたがって生起する事物を決定するという意味において、精神が物理世界の一部であるという命題へと駆りたてられるであろう<sup>(3)</sup>。」

わたしは決定論者のこの二つの主張に対して、前者の引用文に示される考え方を演繹主義（*deductivism*）ないし数学主義、後者の考え方を物理主義（*physicalism*）ないし唯物主義と名づけることにしたい。そして、演繹主義を決定論の方法とみることができ、物理主義を決定論の内容とみることができないのではないかと思う。

このような決定論の陣立に対するパースの反論は、演繹主義に対しては帰納

の論理によって、物理主義に対しては進化思想ないし日常的で常識的な論理——批判的常識主義<sup>(4)</sup>——によってなされているのである。この二種の反論は、ともに科学的証拠にもとづく論証というべきものであって、前世紀から今世紀はじめに支配的であった機械論的、決定論的風潮に対して、確率における統計的頻度解釈とともに強力なアンチテーゼをなすものである。

まず、パースとともに演繹主義の検討から始めよう。いうまでもなく、事実問題とかかわりなく前進できる演繹推論の立場は、数学にみられるように、なにかを仮定しなければ推論をすすめることができず、しかもその仮定については問わないということであって、ここに演繹主義の限界がある。つまり、決定論では、この宇宙におけるあらゆる事実は法則によって厳密に決定されていて、われわれがそれを注意深く演繹しさえすれば、必然的に結果を導き出せるのだという主張がなされ、この主張は科学的推理のための「前提」ないし「要請」(*postulate*)とされるのである。

しかしパースによれば、そのような要請をすることは、その命題が真であることを希望するというにすぎないのであって<sup>(5)</sup>、推理においてそのような要請ないし仮定をすることは誤りなのである<sup>(6)</sup>。必然論による論証は要請にもとづくものであって、要請とは経験以外のなにもものかを仮定することである。パースにとって推論とは、このような要請にもとづくものではなく、われわれの具体的な経験にもとづくものであり、決定的なものではなく、どこまでも暫定的なものなのである。機械論的主張をこのように要請として強く批判するところにパースの経験論的、実在論的傾向をみることができよう。

事実に関する推論、つまり、「非演繹的」(*non-deductive*)ないし「拡張的」(*ampliative*)推論は帰納、仮説およびアナロジーの三種類があるとされるが、これらはすべて、前提に含まれていないなにもものかを結論するという点で、一つの原理に依存し、同じ手続をとるものだとされる。「それらは本質的にはサンプリングにもとづく推論<sup>(7)</sup>」なのである。

われわれはサンプリングにおいて、経験的に (*experientially*)、かつ暫定的に (*provisionally*) 推論を行なうのである。経験的に推論するとは、われわれの結

論が真実 ( $\alpha\lambda\eta\theta\epsilon\iota\alpha$ ) についての知識を有しているのだというようなふりをしないことであり、また、暫定的に推論するとは、われわれの経験が限りなく拡大されて、自然のあらゆる事実が、帰納法にしたがって、推定基準に合うように正しく適用されるならば、われわれの有する近似値は、長い目でみて、限りなく厳密なものになるであろうと考えることである<sup>(8)</sup>。「だから、あらゆる要請は推論の暫定性または経験性によって削除される<sup>(9)</sup>」のである。

しかしながら、帰納法は実のところ、「統一性への限りなき近似」であるとか、類似の状況では類似の事象が生起すると考える普遍的因果律とかを要請しているのではないかといわれるかもしれない。パースは、前者の斉一性の要請とされるものに対しては、そのような要請はなされず、個別的事実はあらゆる種類の経験を利用する帰納法によって確実に発見されること、そして暫定的にすぎなかったわれわれの推論が自身を修正するにいたるのだ<sup>(10)</sup>と答えている。また、後者の普遍的因果律に対しても、そのような要請は誤りであって、推論は経験的特性にもとづいていることが強調されるのである<sup>(11)</sup>。このようにして、経験性にもとづく推論である帰納推理は、つねにランダム・サンプリングと、サンプルされた特性の先取り (*predesignation*) をめざしていこうとするものである<sup>(12)</sup>。

物理主義は普遍的必然性の原理に立って、すべての連続量は厳密な数値をもつとする<sup>(13)</sup>のであるが、これに対するパースの反論としては、先にあげた法則からの微小なずれを指摘することによって、一部なされてはいるが、さらに積極的な仕方では、生物学的、進化論的事実にもとづく思考によってなされているのである。物理主義者によれば、世界は物理法則にしたがってふるまう微粒子(ないし他の純粋に物理的な存在物)のみから成るとされるのであるが、このテーゼは、世界は形式化しえない生物的な存在物からも成っているというテーゼとは両立できない。にもかかわらず、前者のみが真であり、正しい方式だと主張されるのである<sup>(14)</sup>。このような価値判断は物理学そのものからは出てこないものであって、やはり一種の要請と考えられるべきであるから、先に述べたパースのこれに対する反論は、この場合にもあてはまるであろう。

ここで、パースが事象と事実との区別をして、いわばカテゴリーカルな思考法を展開していることに注目しよう。この区別は、物理主義的思考と、それに対する反駁について考えるのに有効な手がかりを与えられるのである。パースによれば、必然論者は、事象が原因をもつことを示すことによって偶然になんかが生じるということを論破できる、と考える誤りにおちいつている<sup>(4)</sup>のである。事象そのものは一般的なものであって、法則によって支配されている<sup>(5)</sup>が、原因であるとされる事実は、全体から抽象された一要素にすぎないのである<sup>(6)</sup>。

そうしてみると、機械論者ないし必然論者は事象というものを、原因と結果とに切りはなしてしまっていて、それぞれをアトミスティックな事実として考えているのではなからうか。そのように切りはなしたうえで、一定の原因から一定の結果が必然的に導びかれるとして、偶然的なもの (*being fortuitous*) をまったく排除して考えている<sup>(7)</sup>のである。このような、いわば硬直した考え方では、ものごとの発展や進化、多様性というものを理解することはむずかしくなるであろう。そうではなくて、ものごとをたんなる事実としてではなく、事象として捕えること、つまり、原因と結果とに切りはなしてしまえない一単位として有機的に考えることが必要となるのである。一つの事象(出来事)として、さらには一つの状況として捕えることによって、チャンスを入れる考え方が成り立つのである。こうして、チャンス認めようとする考え方こそが、状況におけるほんのわずかな相違が重大な結果を生み出すということを理解できるのである。

## 〔註〕

- (1) A. J. Ayer, *The Origins of Pragmatism* (1968), Macmillan. p. 106.
- (2) VI. 37. 傍点筆者。
- (3) VI. 38. 傍点筆者。
- (4) この名称はバクラーが名づけたものである。J. Buchler, *Charles Peirce's Empiricism* (1939), Kegan Paul.
- (5) VI. 39.
- (6) *ibid.*
- (7) VI. 40.

- (8) *ibid.*
- (9) VI. 41.
- (10) *ibid.* 傍点筆者。
- (11) *ibid.* 傍点筆者。
- (12) VI. 42.
- (13) VI. 44.
- (14) S. Körner, *Abstraction in Science and Morals* (1971), Cambridge U.P. p. 16.
- (15) VI. 93.
- (16) *ibid.*
- (17) VI. 67.
- (18) VI. 93.

## 6. チャンスと法則

『必然論の検討』を綿密に読んでみると、たとえばサイコロ投げによるチャンスの実例を述べているところで<sup>(1)</sup>、法則とチャンスとを同列において考察していて、物理主義者のような価値的差別をしていないことがわかる。物理学は長い間、法則から偶然的なものを排除しようとしてきたのであるが、いまや偶然的なものも法則の一部として認めざるをえなくなってきたのである。チャンスも法則と同様に、われわれの宇宙を構成する要素として考えられているのである。チャンスを想定しなければこの世界における多様性を説明することは不可能となる。「チャンスはサイコロ投げの多様性の中に存在するのであって、この多様性は不変なる法則によるものではありえない<sup>(2)</sup>」のである。

「法則」についてのパースの概念は「チャンス」とからみ合っていて、容易にときほごしがたいように思われる。かれは一方では、力学的、機械論的法則と生物学的、進化的法則とを区別するとともに<sup>(3)</sup>、他方では形式法則(*formal law*)と実質法則(*material law*)とを区別している<sup>(4)</sup>。まず後者についていえば、異なる事態においても成立する法則が形式法則であり、異なる事態では成立しないものが実質法則である。形式法則は特殊な事態に依存しないから、経験からは導びき出せないのに対し、実質法則は経験に依存する。サイコロ投げの例でいうと、一回一回の投げによって示される個別事象について、これを数列で表わせば実質法則ということになるが、この数列とは無関係に成立する形式法則

も、また同様に存在するのである。

このように考えられた法則をチャンスとの関連において考察してみよう。個別事実は実質法則との関連においては必然的な因果関係を有しているが、一般的な形式法則との関連においては、まさに偶然であるのだから、「チャンスはすべての法則を排除するのではない<sup>(5)</sup>」ということの意味は、チャンスがこの形式法則と両立するということだと推定できる。

しかしながら、アプリアリな形式法則を設定するというこの点で、パースはかれ自身が批判した「要請」を行なっているのではないかという疑問が生じてくる。「要請」であるとしても、しかしそれはチャンスを、必然的法則とともに、実在の一樣相として認めざるをえないという切実な要求のうえに立っての要請であって、はじめからチャンスを除外しようとする必然論的要請とは区別されなければならないであろう。

パースが法則についてこのような思索を展開するのは、かれの独自の形而上学的カテゴリー論<sup>(6)</sup>からくるものであると考えられる。かれは次のようにしている。

「法則は法則を生み、偶然は偶然を生む。そして自然現象におけるこれらの要素は、その本性からいえば、根源的な紛れもない根幹なのである。しかし、できる限り統一的な仮説をおしすすめるべきだとするリトロダクション<sup>(7)</sup>の原理が主張するように、この二重性を避けるべきだとすれば、唯一の可能な仕方は、法則の最初の芽ばえは一つの実在物で、それ自身偶然に生じたものであって、第一者として存在する、と想定することである。というのは、第一者が第一者であるためにはチャンスの本性をもっており、また、第一者であるものはチャンスなのである。そして、偶然的分布、つまり、まったくの不規則性は、反対する理由がないことによって説明するより仕方のないものなのである<sup>(8)</sup>。」

ここに述べられたことから、「法則」と「チャンス」とは、この宇宙においてそれぞれ別個にはたらく要素であるといえるであろう。先に検討したように、あらゆる事象が法則によって厳密に決定されていると信じる根拠はなにも

なかったのである。つまり、この宇宙においては、法則は部分的に支配するにすぎず、部分的にはチャンスが支配しているのである。しかも、その法則といえども、それ自身は偶然に生じたものであって、第一者としてのチャンスの本性をもっている。このような見解を客観的観念論だとして片付けることはたやすいことであろう。しかし、われわれがひとたび進化や多様性、特異性という、ありふれた事実に着目するならば、必然的諸法則のブルドーザーによって、チャンスという微妙な存在を一方向的に押しまくって、すべてを平らにしてしまうことは、まことに理不尽なことであると考えざるをえないであろう。

しかも、「法則もまた進化の産物であり、その限り不変なるものではありえない<sup>(9)</sup>」のである。先に述べた機械論的立場では、法則についてこのようなダイナミックな考え方をとることができず、自然の本質を質的に固定したものとみなして、法則そのものをどこまでも純定量的関係に還元しようとするのである。だから、機械論的体系ではこの世界における無尽蔵の多様性や進化の現象を少しも説明できないが、これに対して、宇宙の特性としての「純粋な自発性」(*pure spontaneity*)が「法則からの絶えざるずれや極微なずれを生みだしている」と考える方が論理的にすぐれているのだとパースは主張する<sup>(10)</sup>。

しかし、進化とはどのような論理構造をもつものであるのか。おそらく、進化は偶然によって生じたとしかいえない変化を、ある種の必然性、たとえば有用性によって淘汰し、発達させていくというものであろう。だから、チャンスがその後の発展をかなり決定づけているといえるであろう。力学的法則は可逆的なものであるが、進化の法則は非可逆的なものであり<sup>(11)</sup>、歴史的な重みをもったものなのである。

〔註〕

(1) VI. 53~55.

(2) VI. 55.

(3) VI. 13.

(4) VII. 137.

(5) VII. 136.

(6) パースのカテゴリーについては『パース研究(1)』でふれた。『城西経済学会誌』第5巻第1

号 p. 58 参照。

- (7) ibid.
- (8) VII. 521.
- (9) VII. 541.
- (10) VI. 59. 傍点筆者。
- (11) VIII. 318.

## 7. む す び

われわれはふだん、ごく一般的なもので済ましている。日常生活ではもちろん、厳密であるべき科学の世界においても基本的に変りはない。われわれが言語を用いてコミュニケーションを行い、思考し行動するということが、すでに一般的なものによってしか生きられないという証拠なのであろうか。科学は一般から特殊を導き、特殊な現象を単純な一般的法則にもとづいて理解しようとするのである。科学はまさにこのような型の論理によって支えられている。

しかしながら、掛替のない「このもの」についてはどうなのであろうか。われわれは時に、このものについて心をこめて見つめ、その本質を探りたいという思いに駆られる。しかもわれわれが実際に体験する世界というものを心をこめてみればみるほど、個別的なものだけであって、このもののみがもちうる個性、このものの特異性というものしか見出せないのである。科学の論理や哲学の原理はこのような経験の後から来るものなのである。

われわれが一般性のうえにたつこの世界を、経験の真実性に立って眺めようとするならば、もう一つの仮想的な世界を想定しなければならなくなる。このような世界を想定することによって、逆に、個別性という原理に貫ぬかれたチャンスチャンスの存在が生き生きと成立する世界が見えてくるのである。この意味において、パースのチャンス概念はこの世界を理解する一つの有力な手がかりを与えてくれるのではないかと思われる。